



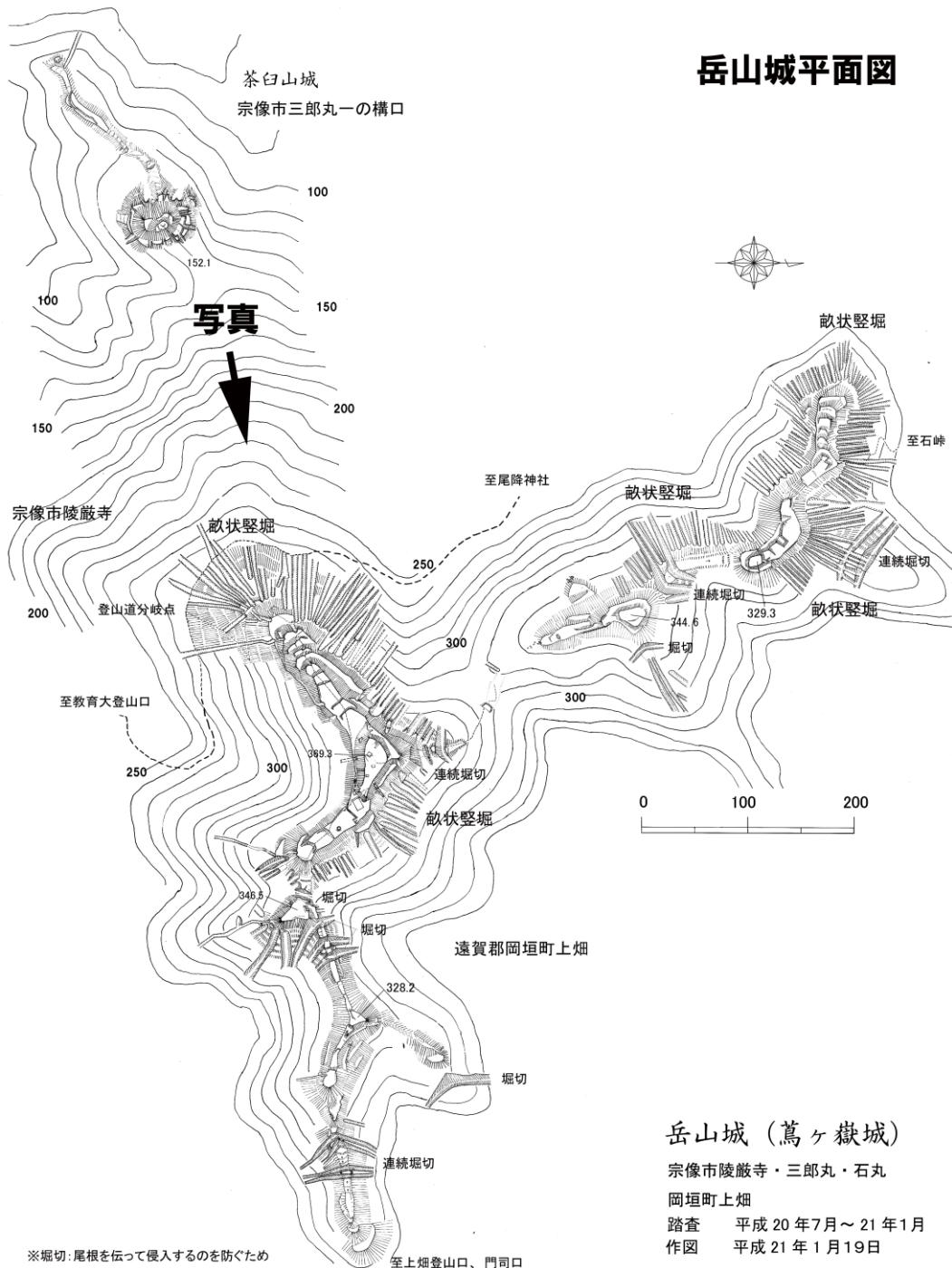
岳山城と畝状堅堀

『新修宗像市史』中世部会から

城山の山城遺構

今は、市民の憩いの山となっている城山（じょうやま）は、宗像市陵厳寺は、戦国時代の大宮司、宗像氏貞が本城としたときの遺構を見ることが出来ます。天正6年（1578）辺津宮第一宮本殿造営のときに作成された置札によると、氏貞は永禄3年（1560）当時蘿（つた）山と呼ばれていた城山に築城を開始し、3カ年をかけて完成させ、山の名前を岳（たけ）山としました。城の廃絶から約400年の歳月が経過し、当時あったであろう櫓（やぐら）や堀等の建築物は既に消滅していますが、注意深く見てみると、山上尾根を中心に駐屯空間として造成された多数の削平地（曲輪…くるわ）や、曲輪への侵入を防ぐために尾根や斜面に設置された空堀（からぼり）の遺構を今も見ることが出来ます。

岳山城平面図



※堀切:尾根を伝って侵入するのを防ぐため
尾根筋と交差するように設置された空堀

岳山城（葛ヶ嶽城）

宗像市陵厳寺・三郎丸・石丸

岡垣町上畑

踏査 平成20年7月～21年1月

作図 平成21年1月19日

藤野 正人

山城の防御施設「畝状堅堀」

特に、岳山城には、山上から斜面を駆け下るように設置された溝状の空堀を多数見ることが出来ます。これは中世山城における防御手法の一つ「堅堀（たてぼり）」と呼ばれる空堀です。堅堀は、同一等高線に

曲輪周囲を巡る横堀と異なり、山上から山下に斜面を駆け下るように設置された空堀です。斜面における横移動を阻害する目的で設置されたものと考えられています。そして、堅堀を多数並べて連続設置したものを「畝状堅堀（うねじょうたてぼり）」と呼んでいます。堅堀を並べて連続配置することにより、堀

と堀の間に畑の畝のような土塁（どるい…土の障壁）が形成されることからこのような名称で呼ばれるようになりました。「畝状堅堀群」、「畝状空堀群」とも呼ばれています。堅堀を並べて多数設置することにより、侵入者は横の連携を阻害され、各々堅堀の堀底を一行縦隊で山上へ進行せざるを得ず、正面から山上へ進行する敵兵は数の優位性を有効に発揮できなかつたものと推定されます。

「畝状堅堀」を設置する城の分布

の分布

そして、特筆すべきは、岳山城の畝状堅堀を構成する堅堀の膨大な数です。山上の曲輪群を囲むように斜面に設置されたその総数は、約170本を数えます。堅堀の数においては、北部九州屈指の設置数となります。山肌を覆うように設置された堅堀群は、遠目にもよく見えることから、視覚的にも攻城軍の戦意を削ぐ効果を発揮したとも考えられます。

畝状堅堀の分布は、東北地方から九州まで、広く戦国期の山城で確認されています。斜面に設置されることから山上にある既存の駐屯空間（曲輪）の形状を改変する必要なく単独で敷設できること。また、堅堀を単独に並べることでも有効な遮断性が発揮できる構造は、近世城郭の高石垣等に比べるとそれほど高い技術を必要とせず、比較的短期間で設置することができるとが広く

採用された要因だと考えられます。

中でも福岡県は、畝状堅堀を設置した山城が多く確認できる地域の一つとされています。県内の畝状堅堀が設置されている山城の傾向としては、有力領主の本城や、敵対勢力との境目の城に多く確認されています。そのことから畝状堅堀は、特に重要な城に設置されていることがわかります。宗像氏の城郭においても、宗像氏貞が本城とした白山城や岳山城、そして敵対した糟屋郡立花城を拠点とする大友勢力との境目に近い、許斐城（王丸）、片脇城（田島）、そして宮永城（宮若市宮永雁城）に畝状堅堀の設置が確認されています。

戦国時代の福岡県地域は、有力領主が割拠し紛争が絶えなかつた戦国の激戦区ともいえます。有事において迅速な城郭整備が求められた中で、畝状堅堀は、コストパフォーマンスに優れた防御施設として多くの山城に採用されたものと考えられます。

（中世部会 藤野正人）



写真 岳山城復元想像模型 小川健一郎氏製作
南西方向から見た岳山城山頂部、斜面を駆け下る堅堀群（畝状堅堀）に注目。